

ブランドの変遷を左右してきた4つのドライバー

Driver 3 学ぶ場の価値の創造

コロナ禍で進んだオンライン化。 だからこそ改めて期待される集う場としての価値の創造

「キャンパスがきれい」「自宅から通える」「交通の便がよい」「勉強するのに良い環境である」「学修設備や環境が整っている」等、学ぶ場に関する項目は多く、重視する高校生も多いが、下の図に示している通り、大学のキャンパスについては、時代によってその価値が大きく変化してきている。1960年代の高度成長期には工場等制限法によって、大都市部におけるキャンパス設置や学部増が禁止され、郊外キャンパスが増加した。2002年には小泉改革の一環として、工場等制限法が廃止され、その後、キャンパスの都市部回帰が積極的に進められるようになった。2015年には小誌195号で「都市部を目指すキャンパス」という特集を組ん

だ。この特集で、都市部と周辺部の収容定員の変化を算出したところ、関東・東海・関西いずれの地域においても、キャンパス再配置によって都市部の収容定員が増加したことが明らかになった。一方、キャンパス移転によって高校生の支持が高まると、志願倍率が高まるが、その効果は一時的であり、キャンパス移転のみでは高校生の支持を集め続けることは難しいことも明らかになっている。

2010年代になると、アクティブ・ラーニングが積極的に導入され、主体的・能動的な学びの実現を考慮したキャンパス設計が進められている。ラーニング・commonsやグローバル・commonsのような、学生が集い、学び、発表し、交流す

る新たな場作りに注目が集まるようになった。毎年弊社が実施していたトレンド発表会では、2015年、進学領域のトレンドを「LIVEラリー」とし、図書館が主体的・能動的な学びの場に変化していることを社会に発信した。

高校での「主体的・対話的な学び」が接続されるキャンパスに

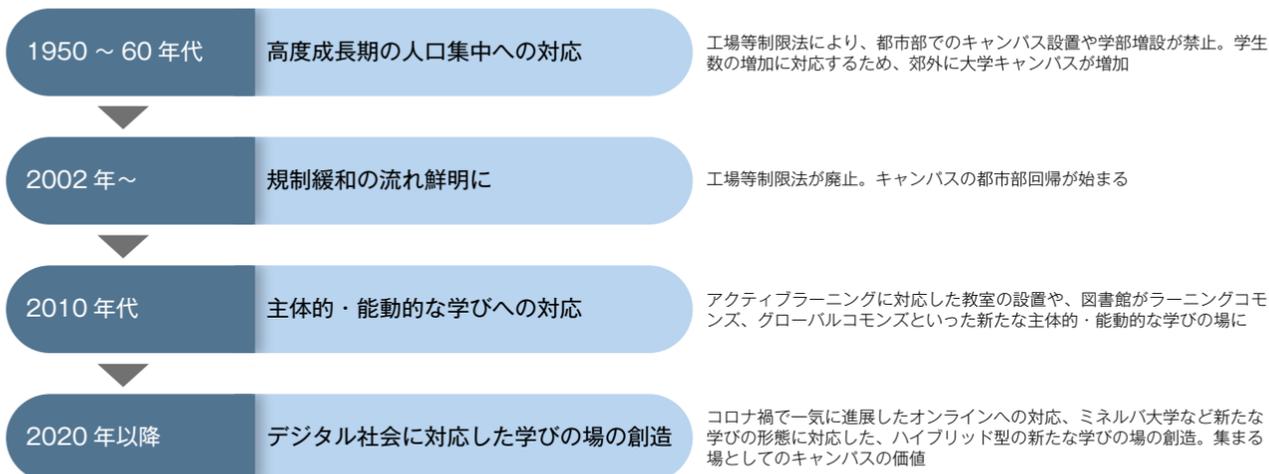
そして、2020年には新型コロナウイルス感染拡大という、これまでに経験したことのない事態に直面することになる。まさに「三密」を回避するために、通学が禁止され、正課外活動も制限されるようになる。授業は試行錯誤を経ながら、強制的にデジタル化、オンライン化が進められた。コロナ禍3年目となった現在では、ストリーム配信型、オンデマンド型、ハイフレックス型とオンライン授業も多様化し、その功罪も整理され、知見も蓄積されてきた。学生支援システムもデジタル化が進み、LMS等によるサポートも定着しつつある。学生にとってみれば、オンライン上で授業に出席でき、レポート提出や教職員からのフィードバック

もできるという点では利便性が高まったといえる。

では、キャンパスはいらなくなってしまったのだろうか。それは否であろう。2022年の学校選択重視項目では、「キャンパスがきれい」の順位がアップした。これは、単にきれいなキャンパスを求めているということだけではなく、オンラインが浸透し、その価値を実感しているからこそ、敢えてリアルに集まる学びの場としての新たな価値を学生達が渴望しているという表れだと考えられる。2010年代に進められた主体的・能動的な学びは、高校の新学習指導要領では「探究」という自ら問いを見つけ、解決しようとする授業として推進されている。2025年にはその世代が大学に入学してくる。彼らが大学入学後にながかりしない教育をすることが重要だ。さらに、これからはメタバースの時代が到来するともいわれている。そうした時代だからこそ、デジタル化・オンライン化をうまく活用しながら、10代後半から20代前半という多感な時期を過ごすキャンパスという場の価値をどう作っていくのか。どの大学においても、新たなチャレンジとなるだろう。PGM (文/小林 浩)

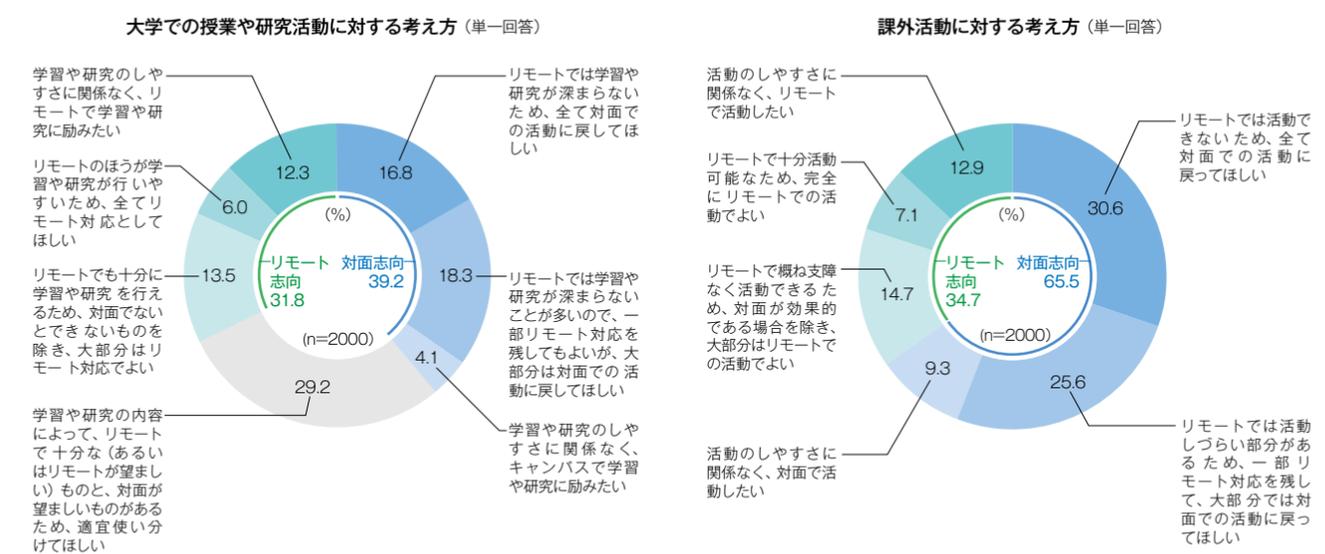
年代ごとの学ぶ場の価値の変遷

人口集中の抑制、主体的・能動的な学びへの対応、コロナ禍を経て急速なデジタル化の対応へ



(編集部作成)

コロナ禍における大学の授業や研究活動、課外活動における学生の考え方 授業や研究活動はリモート志向と対面志向が均衡、一方で課外活動は対面志向が過半数に



(三菱UFJリサーチ&コンサルティング 2022年5月「コロナ禍の下での大学生等の生活実態と人口移動の動向に関する調査報告」より抜粋)